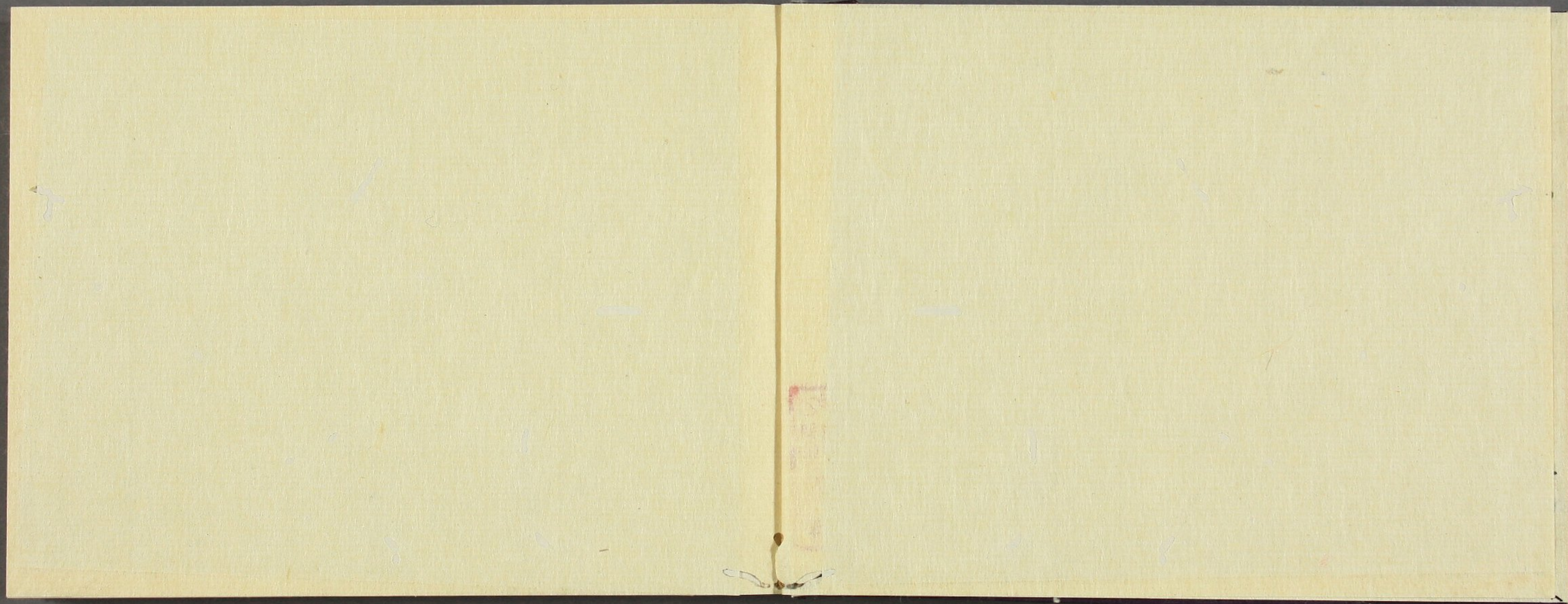


楓





松風

卷名哥并詞字を号に
男と介を比わし金と松と
此より比する松を名に
けりしおれ詞は松風と
ひよあひひりともあり

源氏物語の松色よりわき
結合同年也明る姫君の事
記すれりよきし命は源氏
廿八三月十日の子生す

ひんがしを詠つてゆく中へ
いもほはよそをぬ

ひんがしの院ニ東院東遊
いそ草道生の老の末并

絵合末ホよ出つた

あつたはつた——政府の家

あつたはつたの事なつた

いふ政府家用をいふ

あつたはつたの事なつた

ひんがしを詠つてゆく中へ

ひんがしを詠つてゆく中へ

水のあつたはつた空輝君末稿

あつたはつたの事なつた

あつたはつたの事なつた

あつたはつたの事なつた

あつたはつたの事なつた

あつたはつたの事なつた

あつたはつたの事なつた

あつたはつたの事なつた

あつたはつたの事なつた

礼記曰聘則為妻奔則為
妾註曰聘同也妻之言齊也
以礼見同則得與之敵體
妾之言接也言得接見於
君子不得與之敵體也
之也聘以礼送也奔以
無媒也之也之也
也於妾之儀也仍寢於
居也也但於禮休
身之也

これ源氏の儀
如可也女と位如也
所のさうしひのさう柳

さうしひ

ありよの源氏がわたり
上流ありま事行れぬ
女に於て身のはりも 明の
月よと早下さる也
こよあやむししるも 明の
のよの是六条は是所以下

よむかへしつゝぬ 宿ちと
あしつゝいふらつゝぬ也
母中といふは 是より明石
上の舟に宿ちといふ詞也
よむの舟に自らと船者出ま
しむる也
よむつゝいふ人を出んもつ
しむる也
よむつゝいふ海も、いふらつゝ
いふる事といふ

よむつゝいふる也 先程の
舟中といふは
舟中の地也
よむつゝいふる也
上段 明石の舟は後
さんといふる也 造作の料也
かののよ 如舟也 字萬計
随分といふるも用る也 さい
あしつゝいふらつゝいふる也
よむつゝいふる 宿守は海事也
よむつゝいふる 下段也 雜念也

うらのたをゆ 源氏也
嵯峨の山堂は絵合よとい
出せり山堂に棲霞寺よとい
かきくくちり故よ大空えされ
南よありてしと下はんしり
栖霞觀いたた宮融云の
山た也後よちて成て棲霞
さしとえしと清涼さし東よ
ある阿弥院山堂是也清涼さ
かきの西よありち也

まきくくちり 氣さくも也
おゆくのめん 源氏の家礼
の受領をといて清涼ん
はくち也
志はくちる山堂に 志はくちも
思ひぬく山堂にふくちも也
はありちりありちり也
さふちりも 居る山堂也
源氏の山堂ちりも山堂の
事也

字は、古く申物より始り
致す物なり。おととしは、二
部主とのありたり。

きり物なり。さうとて
りわて、頼りたる申物
そのあたりの、后公上流あり
て、は田島なり。とあるなり
きり、こゝも、あつたなり。

是

ひまごらよひあつた。

強顔は、あつたなり
と略し、ちや、あつたなり
ちや、ちや也

さう、さう、さう、さう
あつたなり。さう、さう、さう
さう、さう也

は、さう、さう、さう、さう
券なり。さう、さう、さう、さう
券と支那のあつたなり
あつたなり。さう、さう、さう、さう

大敵のまゝいひと けぢめ
とらまひひれを明る屋
源氏のあつとつるまを
つまをくく早て徳和の
事をも知てする也

の初んとは明石の上殿を
おろしはひよ返すあると不
當なる又始君の妻中子
おい出ゆやとつるはとん
とらよおはひ源氏の也

けりいそえ けぢめの
とかく中のさる也

人海にそんよひ 源氏の
是明る上の中と案
はつたもよれおを作ら出
てく薬也かふい今中を
よかりしよをまひつら
かぬ用なき也
かくゆふちりなりし
所ふもはる也

元光のあきん 惟光と
はつらんをあらふ

あつたつて 大井の
色をたはつていふひく

明石浦よりあつて
あつた

あつたのすきあ 明石のあつ

のあつたあつたあつたは
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

請嵯峨院为大覚寺之由

卷状見菅家御集

^中大覚寺ふしと嵯峨院と号

寺嵯峨天皇昔ツノカミ日ヒ因放

之地也滋殿ハ泉ノ原ト号

下ニ大覚寺ハ比レ滋原アリ

棲霞ニ寺ニ有ル也ト号

寺ノ名ハ大覚寺ト号

寺ノ名ハ大覚寺ト号

名所也在大覚寺南

寺ノ名ハ大覚寺ト号

寺ノ名ハ大覚寺ト号

寺ノ名ハ大覚寺ト号

寺ノ名ハ大覚寺ト号

寺ノ名ハ大覚寺ト号

寺ノ名ハ大覚寺ト号

寺ノ名ハ大覚寺ト号

寺ノ名ハ大覚寺ト号

寺ノ名ハ大覚寺ト号

寺ノ名ハ大覚寺ト号

むらさきくさくさ

のまじりていこばちのうら
軍也

露のくさくさくさくさくさくさく
葉のくさくさくさくさくさくさく
さくさく

あつちのくさくさくさくさくさく
内訳もくさくさくさくさく
くさく

あつちのくさくさくさくさくさく
父母のくさくさく

あつちのくさくさくさくさくさく
さくさく

あつちのくさくさくさくさくさく
おれはくさくさくさくさくさく

あつちのくさくさくさくさくさく
あつちのくさくさくさくさくさく
あつちのくさくさくさくさくさく
あつちのくさくさくさくさくさく

あつちのくさくさくさくさくさく
あつちのくさくさくさくさくさく
あつちのくさくさくさくさくさく

入心にあらざるをいふは
明なるよきははたそのあらは
もいふにあらざるなり
いふはあらざるなり

そのいふにあらざるなり
いふはあらざるなり

いふはあらざるなり

いふはあらざるなり

いふはあらざるなり

いふはあらざるなり

いふはあらざるなり

いふはあらざるなり

いふはあらざるなり

いふはあらざるなり

いふはあらざるなり

いふはあらざるなり

いふはあらざるなり

いふはあらざるなり

いふはあらざるなり

と紀元々の宰相のあり
又教よあれ京のや下り
人々の御おれりる
みそそしき寺のあり
風景よいふとふ
よすはまおのりく
きりお常一のあり
そ目とある 上洛のあり
海のことと 明のあり
入るまのあり 後

下いよれれ 門出るれ雅
はあれ祝のあり
よりいふもん 夜光玉
史記曰尚有徑寸之珠照
車前後各十二景
楚王臣隨侯蛇の病の命
たりし蛇七寸玉り合
夜来テ思フ報シテリ玉
楚王ニ献ス夜中常有
光明故名夜光玉

又言は入力をうへに
云才也

余も今もふに世に
治むるはむはく思
ちうや

那まきとらふに
入るのやうらうら

あらまもやきうの
堪ぬともや
いともかき一や

と一のこいこ
海をけいこ

もろもよおに

播磨守の任より
史婦をさし
とらののり
方角とち
出ら

か

源氏の

石上姫君がこころを
ちまねんお束すこころを
はるるまじとてり

まそ一世入たの東より
玉守よるわてくるいふ
世にまてくるを母君乃
まよ別もそいふ也

はる明石よ也
いふえあひいんよと
かこいあひん事れね

東のいんよこころもあぬ
まよまのまよあひいん

おくりよしたも父といふま
ふまの字入たに二友か
のちまよ今ま又明石
のちんまよもるこま

かこよはなすて門出のち
姉出家のま也又二友か
のこまあひいんよ也
まよこころいんかのま也

世中とてそつり

是より入るる女より

竹の洞や

と世中わるともそつり

おもしろいものも

かほきかよるる

そつり

おもしろいものも

領とてそつり

く思ひて出家せり

おもしろいものも

入るる女より

詩曰夙興夜寐七

所生註云夙興夜寐進

德修業以無忝辱其

父母

尚意得方

其職昇進

とて、尚分の利

もるる事

おそせとせつる任母
おとしむる道中にて
出とふちしむる也
そのこよはなまて、我分
と随分よくさうしむる
海と出ふる也、明石上
の成長ははまて、あま
ち、早あふといふ也
君のちし、明石とて
ちし、おとせ、おとあふ

言はくは、おとあふ、
し、おとあふ、
あ、おとあふ、
よ、おとあふ、
住、おとあふ、
おとあふ、
冒、おとあふ、
行、おとあふ、
叶、おとあふ、
おとあふ、

わが君とていそがし

婚君の誕生の事也

ちまごともたは婚君乃

まあゆふと明るよを

別して宿縁ありとて

しく思ひて上洛と信

まや

もごころ地ハ明る上婚君

ホ也瑞葉の事と思ふ

天子は方所への

天人墮三途事也 勅文

天上の樂書てゆに違ひ也

地獄餓鬼畜生とて途

とて修羅と加て四部

とて天人とてて六乃

とて途ハ之悪道也

此等りともわこをありもあ

よかこもつてしつらつら

悲のいふわ子天上欲退

時、文のいふもや

正法念經云天と欲逐時
心出大苦惱地獄諸苦毒
十六不及一

今さらばはなれ

はあまの夜よふたし
うたと云詞のあまあり
不用之は詞若菜よせり
仍可界

はあまの

あまの

あまの

あまの

あまの
あまの
あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

とてしとてしとてしとてしとてし
とてしとてしとてしとてしとてし

女にらよのいら幸の昔業
はまよる事とと源氏念
此の如く始者よいれ
はまもれは末いあ
とちしとてしとてしとてし
とてしとてしとてしとてし
とてしとてしとてしとてし

おまの内のを順は也

おまの内のを順は也

おまの内のを順は也

家のまを本井の家也

おまの内のを順は也

おまの内のを順は也

おまの内のを順は也

おまの内のを順は也

おまの内のを順は也

おまの内のを順は也

おまの内のを順は也

はくしんから 源氏の世
家名がよびついでとくまへ
らばつとくまへ

まへつとくまへ 源氏家名
はくしんから 源氏の世
はくしんから 源氏の世

源氏の世
はくしんから 源氏の世
はくしんから 源氏の世

まへつとくまへ 源氏の世
はくしんから 源氏の世
はくしんから 源氏の世

はくしんから 源氏の世
はくしんから 源氏の世
はくしんから 源氏の世

はくしんから 源氏の世
はくしんから 源氏の世
はくしんから 源氏の世

うづの院の所

紫上の大井と桂院

部とつよの好み

水原の海とれ

桂院の桂川の

とのえとて 紫上返

源氏にきく二三

とある返

とのえとて

あゝとて

うづの院の

つよの好み

述異記曰晋王質伐木

至信安郡石室山見數

童子因碁与質一物如

棗核含之不飢局未終

斧柯爛盡既歸无復

時人

まゝのうづの

源氏のうづの

はるちやめののちのち
源氏の換振とのみ
あよえ 源氏の領也
かある所は二条院は東院
はるちよきま ちよきま
しとんきき
はるちよきま 大井ねも也
ろくのちよきま
桂院と仰られねも大
井(出)あつこちよきま

一也

あかこのちよきま
お中書王の口説あつこ
ちよきま
かふこちよきま ちよきま
ちよきのちよきま
ちよきのちよきま
ちよきのちよきま
ちよきのちよきま
ちよきのちよきま
ちよきのちよきま
ちよきのちよきま

まはらととも執事、御も
かまらまゝくもいふ
庭かまらまゝくもいふ
女君よかまらまゝくもいふ
かまらまゝくもいふ
年月の流あともいふ
かまらまゝくもいふ
うちまゝくもいふ 源氏の御也
袂に男に下まゝくもいふ
かまらまゝくもいふ
かまらまゝくもいふ

あまぐ 岡伽具 アカハ水
梵語也
木下のもも 居るは木下也
はらうくもいふ
若君より養ふをいふ
よもや あまにいふはあまに
いふはあまに
あまにいふはあまに
明石のいふはあまに
居るはあまに
あまにいふはあまに

あまのついで

とてついで 居る御也

とてついで 居る御也

源氏のついでに居る御也

居る御也

是し命のついでに

あまのついでに居る御也

あまのついでに居る御也

あまのついでに居る御也

あまのついで

あまのついでに居る御也

あまのついでに居る御也

居る御也

あまのついでに居る御也

あまのついで

中務官のついでに居る御也

あまのついでに居る御也

あまのついでに居る御也

あまのついでに居る御也

あまのついでに居る御也

源氏のこころをあてしむ
まも似合はるやうなま
ま

この君もいしはせしむ

姫君也あへ朝のついで
に

いふもあへ源氏中や

二条院よ京上の養子あ

まはしはるもあはせ

のいふもあへよ 京上の

子あへあへあへあへ

あへあへあへあへあへ

あへあへあへあへあへ

あへあへあへあへあへ

あへあへあへあへあへ

あへあへあへあへあへ

あへあへあへあへあへ

あへあへあへあへあへ

あへあへあへあへあへ

あへあへあへあへあへ

いしはらむかき

宮崎のついでに

志しむるは

玉のついでに

とほふは

はらむるは

はらむるは

はらむるは

はらむるは

わが志は

姫君の源は

倅や

あゝお思ひ

お思ひ

こそある

志しむる

おの志は

ついでに

姫君は

とほふ

おとしのさかちるる

けさなまをて ちきりりひ

ちきりりひ ちきりりひ

ちきりりひ ちきりりひ

ちきりりひ ちきりりひ

ちきりりひ ちきりりひ

ちきりりひ

ちきりりひ ちきりりひ

ちきりりひ ちきりりひ

ちきりりひ

山のおもてに おもてに

ちきりりひ

ちきりりひ ちきりりひ

ちきりりひ ちきりりひ

ちきりりひ ちきりりひ

ちきりりひ

ちきりりひ ちきりりひ

ちきりりひ ちきりりひ

ちきりりひ ちきりりひ

ちきりりひ ちきりりひ

院におもむる也

あまのけのちある一とさばて

あまのけの飯の名也

噪ナワリ

うしひを 物飼也あま

はるはちのけの道と也

出ぬ也

野におもむる あまのけ

あまのけのけの道と也

こある一人也

こある一人也

水鳥付枝事

救九とけのちをさす

山をさすのけの道と也

水はけのちをさす

あまのけのけの道と也

山はけのちをさす

あまのけのけの道と也

付也延壽十年十月十日

雅楽寮人於清凉殿

お養母権中納言夜直
著小鳥お菊枝立階お
養之船木氏有進山勢
宇治室藏日紀子永觀
年中朱雀院へてある
小鳥萩の枝つと他子
お雀立は馬尾より鼻
とぞ御ておし付おま
しとありて 養之家も
山はとおとさう

どひかへて 順流也
次中にりらるや

川のわると 山海乃ららの
海にあらもをねえり
下まわし桂殿よおしり
くくくもあうもな
解中まうらもさう
せくおとけらうらう

せくい絶句の詩也
お月あそび 山物也

ひまわりをこしらへんまわり

わさどかぬぬの庭のまき也

おろふあひる 秋あけの平

酒あり

殿上人あひ人 けいけい

よきあひるあひるあひる

くはくはくはくはく

あひるあひるあひるあひる

あひるあひるあひるあひる

あひるあひるあひるあひる

あひるあひるあひるあひる

あひる

あひるあひるあひるあひる

あひるあひるあひるあひる

あひるあひるあひるあひる

あひるあひるあひるあひる

あひるあひるあひるあひる

あひるあひるあひるあひる

あひるあひるあひるあひる

おの弁なりきり 九位
職事也及上人五合の
なり

月のとびのくまの

桂のふもと桂里よき
紋遊より結句のふ
りしすれおのりるけ
ほりたる也

兼若苑に月中有河
上有桂樹高五百丈

うわさるるもあや

勅書の細るる

うのふあそひなりとも

ふあのおおのまもそなりとも

あつあつのはあつるる也

又あつるるも

兼してあつるる也

あつるるの物 儲物に被物

あつるるのあつるるの装束を用

意をあらわす也

さうあつたから ぢいぢいぢい
ぢいぢいぢい

さうあつたから 源太の
ぢいぢいぢいぢいぢい
ぢいぢいぢいぢいぢい
ぢいぢいぢいぢいぢい
ぢいぢいぢいぢいぢい

我が方の園田を満ちる
とさたらや行幸がとえ
あつたや行幸がとえ
却々音もなれやとえ

いんげん

行幸よとせ

久松のまをひかぬぢいぢい
いんげんはとよら田んぼ
や何ぢいぢいの中ぢいぢい
いんげんはとよら田んぼ
いんげんはとよら田んぼ
いんげんはとよら田んぼ
いんげんはとよら田んぼ
いんげんはとよら田んぼ
いんげんはとよら田んぼ

月宮よりあはれ給ふ

あはれ給ふ

中よあはれ給ふ

夕べの月よあはれ給ふ

あはれ給ふ

あはれ給ふ

あはれ給ふ

あはれ給ふ

あはれ給ふ

あはれ

あはれ給ふ

あはれ給ふ

あはれ給ふ

あはれ給ふ

あはれ給ふ

あはれ給ふ

あはれ給ふ

あはれ給ふ

あはれ給ふ

あはれ給ふ

月と源氏よもろくして
その程を如佳月が
のりもあまも如

をたう人のいひこし

この道の谷に霞の谷とて
の故院崩さぬまじり
は右大弁故院の恩寵
とがやう——まを忘る
く思ひおひとけしと流
ちりぬ——まをたすまの

住み故院の流るまを——

あり——まをまうとては
共今御あしむらわあり

をいひあひしひまを子や
うらまひまうらる 酔後各

興はまう感はまを——
席のいひまを——

こもまをまはまをまを
かてまをまをまをまを
まをまをまをまをまを

しものえしんむねまはれ
と也

と東にんふふふふふふ

と也

と東舎人の隨身也

中山大将候云補物節事
定物節本中中将相若陣
座定福先成府奉付
殿上中将奉_{上卿}同後令_人
次中將執事定書番長

以下下給將曹依次日

立称唯進立再祥と按

物節といふと東の舎人

中東遊達一と也

西遊物節も補と云中

番長府生も有之是

よめて春日祭が若葉

の使の羽林東遊と東十

人器具て社政球子駿

河舞がと舞と也賭り

相撲の大なる遠ありて
何と昔有る遊事か
節の役也を乃神系
の人数人かとも衆
舎人等を以てむ是
ふみこり 神樂也
わきけさふくびぬ也
大井の 桂より京へも
ゆくと大井の里より
まこや

山里の山物より 大井の
神が隔ちるもやい葉
よつとらぬ也

いよふまあしー 海女網
也こころいあらしーあも
遠字もれ也

いよふまあしーの 女
多の縁ありて桂あり
酒宴は酔ぬくははれ
あてははるのいよや

如也

まゝに記 海女
わりの年もわが如
の如也

ちよそみくし如 兼上
これくくあなまじ如
目一とくまじくし如
ほくくくくくくくく
海女洞 始君の事也
とれくくく ぬくくくく

おあや 兼上も海女
心おれくくく 始君
養育一ぬく也

あましくくし 兼上の方
あましくくくく ぬく也
ひのこの 二才といくく
次生蛭子雖已三歳而脚
尚不立 四五本紀
そいふくくく ぬく也
こくくく ぬく也

はつとあはれ せうとあはれ
こゝろもあはれ せうとあはれ
こゝろもあはれ せうとあはれ
こゝろもあはれ せうとあはれ
こゝろもあはれ せうとあはれ

世草よのむのむに
源氏のまゝに思へば
はつとあはれ せうとあはれ
こゝろもあはれ せうとあはれ
こゝろもあはれ せうとあはれ

隔意とこゝろもあはれ
世草よのむのむに
源氏のまゝに思へば
はつとあはれ せうとあはれ
こゝろもあはれ せうとあはれ
こゝろもあはれ せうとあはれ

ちこゝろもあはれ 世草君
のまゝに世草よのむのむに
はつとあはれ せうとあはれ
こゝろもあはれ せうとあはれ
こゝろもあはれ せうとあはれ

二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

